

むかし丹波の国に稻村屋源助とい  
う金持ちの商人が住んでいた。この人  
にお園という一人の娘があつた。お園  
は非常に怜俐で、また美人であつたの  
で、源助は田舎の先生の教育だけで育  
てる事を遺憾に思い、信用のある従者  
をつけて娘を京都にやり、都の婦人達  
の受ける上品な芸事を修業させるよ  
うにした。こうして教育を受けて後、  
お園は父の一族の知人——ながらや  
と云う商人に嫁けられ、ほとんど四年  
の間その男と楽しく暮した。二人の仲  
には一人の子——男の子があつた。し  
かるにお園は結婚後四年目に病氣に

なり死んでしまつた。

その葬式のあつた晩にお園の小さい息子は、お母さんが帰つて来て、二階のお部屋に居たよと云つた。お園は子供を見て微笑んだが、口を利きはしなかつた。それで子供は恐わくなつて逃げて來たと云うのであつた。そこで、一家の内の誰れ彼れが、お園のであつた二階の部屋に行つてみると、驚いたことには、その部屋にある位牌の前に点された小さい灯明の光りで、死んだ母なる人の姿が見えたのである。お園は簞笥すなわち抽斗になつている箱の前に立つてゐるらしく、その簞笥に

はまだお園の飾り道具や衣類が入つ  
ていたのである。お園の頭と肩とはご  
く瞭然見えたが、腰から下は姿がだん  
だん薄くなつて見えなくなつている  
——あたかもそれが本人の、はつきり  
しない反影のように、また、水面にお  
ける影の如く透き通つていた。

それで人々は、恐れを抱き部屋を出  
てしまい、下で一同集つて相談をした  
ところ、お園の夫の母の云うには『女  
というものは、自分の小間物が好きな  
ものだが、お園も自分のものに執著し  
ていた。たぶん、それを見に戻つたの  
であろう。死人でそんな事をするもの

もずいぶんあります——その品物が檀寺にやられずにいると。お園の著物や帯もお寺へ納めれば、たぶん魂も安心するであろう』

で、出来る限り早く、この事を果すという事に極められ、翌朝、抽斗を空にし、お園の飾り道具や衣裳はみな寺に運ばれた。しかしお園はつぎの夜も帰つて来て、前の通り箪笥を見ていた。それからそのつぎの晩も、つぎのつぎの晩も、毎晩帰つて来た——ためにこの家は恐怖の家となつた。

お園の夫の母はそこで檀寺に行き、

住職に事の一伍一什を話し、幽靈の件について相談を求めた。その寺は禅寺であつて、住職は学識のある老人で、大玄和尚として知られていた人であつた。和尚の言うに『それはその簞笥の内か、またはその近くに、何か女の気にかかるものがあるに相違ない』老婆人は答えた——『それでも私共は抽斗を空にいたしましたので、簞笥にはもう何も御座いませんのです』——大玄和尚は言つた『宜しい、では、今夜一拙僧が御宅へ上り、その部屋で番をいたし、どうしたらいいか考えてみて御座ろう。どうか、拙僧が呼ぶる時

の外は、誰れも番を致しておる部屋に、  
入らぬよう命じておいていただきた  
い』

日没後、大玄和尚はその家へ行くと、  
部屋は自分のために用意が出来てい  
た。和尚は御経を読みながら、そこに  
ただ独り坐っていた。が、子の刻過ぎ  
までは、何も顯れては来なかつた。し  
かし、その刻限が過ぎると、お園の姿  
が不意に簾笥の前に、いつとなく輪廓  
を顯した。その顔は何か気になると云  
つた様子で、両眼をじつと簾笥に据え  
ていた。

和尚はかかる場合に誦するよう  
に定められてある経文を口にして、さて  
その姿に向つて、お園の戒名を呼んで  
話しかけた『拙僧は貴女のお助けをす  
るために、ここに来たもので御座る。  
定めしその簞笥の中には、貴女の心配  
になるのも無理のない何かがあるの  
であろう。貴女のために私がそれを探  
し出して差し上げようか』影は少し頭  
を動かして、承諾したらしい様子をし  
た。そこで和尚は起ち上り、一番上の  
抽斗を開けてみた。が、それは空であ  
つた。つづいて和尚は、第二、第三、  
第四の抽斗を開けた——抽斗の背後

や下を気をつけて探した——箱の内  
部を気をつけて調べてみた。が何もな  
い。しかしお園の姿は前と同じように、  
気にかかると云つたようにじつと見  
つめていた。『どうしてもらいたいと  
云うのかしら?』と和尚は考えた。が、  
突然こういう事に気がついた。抽斗の  
中を張つてある紙の下に何か隠して  
あるのかもしねない。と、そこで一番  
目の抽斗の貼り紙をはがしたが——  
何もない! 第二、第三の抽斗の貼り  
紙をはがしたが——それでもまだ何  
もない。しかるに一番下の抽斗の貼り  
紙の下に何か見つかった——一通の

手紙である。『貴女の心を悩ましていたものはこれかな?』と和尚は訊ねた。女の影は和尚の方に向つた——その力のない凝視は手紙の上に据えられていた。『拙僧がそれを焼き棄てて進ぜようか?』と和尚は訊ねた。お園の姿は和尚の前に頭を下げた。『今朝すぐには寺で焼き棄て、私の外、誰れにもそれを読ませまい』と和尚は約束した。姿は微笑して消えてしまつた。

和尚が梯子段を降りて來た時、夜は明けかけており、一家の人々は心配して下で待つていた。『御心配なさるな、

もう二度と影は顯れぬから』と和尚は一同に向つて云つた。果してお園の影は遂に顯れなかつた。

手紙は焼き棄てられた。それはお園が京都で修業していた時に貰つた艶書であつた。しかしその内に書いてあつた事を知つているものは和尚ばかりであつて、秘密は和尚と共に葬られてしまつた。